# 逆行したＴＳヒカルは頑張ります

アキラ天狗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイツと会った一番はじめに時間をもどして!!

もどりました。

女の子になって。

そんなお話が読みたくて作ってしまいました。

中学３年の５月７日から逆行してるのでこの小説のヒカルはそれ以降の原作を知りません。

ヒカルの見た目はかわりません。

あかりちゃんとは親友。

アキラは猪突猛進。

そんなほのぼのギャグ路線たまにラブコメシリアスを目指しております。

囲碁知識が全くないので対局シーンがありません…。

原作にない事は全て私の想像で書いています。

亀更新です。

処女作。

# 目次


1．気がついたら園児でした。 1
2．再会しました。 5
3．触れ合い 9
4．今後 14
5．囲碁教室 18
6．ヒカルと佐為の人生 23
7．自覚？ 28
8．会いに行く 35
9．アキラとの対局 41
10．いつの間にか 48
11．塔矢邸での一幕 57
12．院生試験 63
13．一緒に 70
14．初めて 76

# 1．気がついたら園児でした。

「神さま！お願いだ！はじめにもどして！」
「アイツと会った一番はじめに時間をもどして!!」

うわあああああああああああああ

その後、記憶がない。
気がついたら朝だった。

「ヒカルー、そろそろ起きなさーい！遅れちゃうわよー！」
母親の声に体を起こす。
（いつの間に寝たんだろう…）
そう思いながらヒカルは体を起こす。
「……ん？」
（何でお母さん達の部屋で寝てんのオレ。）
辺りを見渡し、またもや違和感。
――部屋が広い。
そんな訳ないか、と立ち上がり、その目線の低さに息を呑む。
「ななななっなんっ！何だコレ！」
天井が高い！ドアがでかい！
そう心で叫びながらふと鏡台が目に入る。
「……なんじゃこりゃあああ!!」
一際大きな声で叫んで鏡に駆け寄る。
そこに映っていたのは幼き日の自分であった。

「ヒカル、何大きな声出してるの」
部屋に入ってきた母親を見てまたもやヒカルは驚く。
「お母さん……若返った……」
「何言ってるの。どこで覚えてきたの？そんな言葉」
自分の知っている母親はもうすぐ４０代だったはずだ。
だが目の前にいるのは明らかにそれより若い。
そんな戸惑っているヒカルを「寝ぼけているのね」と勘違いしたヒカルの母――――美津子は優しく微笑み抱き上げる。
「わっえっはぁ!?」
中学３年男子である自分を母親が持ち上げている。
あまりの事にヒカルは絶句してしまった。

そして着替えさせられた。
幼稚園の制服に。
（オレ、もしかして過去にきた？）
目線の低さ。若い母親。何より鏡に映る幼い自分。
母親が用意してくれた朝ごはんを食べながら考える。
どうしてこうなったんだろう。
――――アイツと会った一番はじめに時間をもどして!!
あの後の記憶がない。
という事は、もしかして神さまが願いを聞いてくれた？
ちょっと戻しすぎな気もするが。
ヒカルは無言で、眉間にしわを寄せて考える。
カレンダーを見ると１９９１年５月。
それはヒカルの記憶から１０年前の日付である。
（オレはまだ４歳という事か。理解してきた。幽霊といたせいかな、だんだんと冷静になれてきたぞ）
ちょっとやそっとじゃ驚かないぞと自負する。
さっき叫んだのは気のせいだ。うん。
食事を終えるとトイレに行きたくなった。
一人でトイレに向かうヒカルに美津子は唖然としたが、ヒカルに

とっては当たり前の行動である。
ドアノブを背伸びしながら開け、常備されているであろう踏み台に乗って下半身を出す。
そして自分の股間を見て――。
「ないいいいいいいいいいいいいい!!!!」
本日二度目の絶叫である。
「ヒカル!?どうしたの!?」
母親が慌てて駆け寄る。
トイレを開けるとお尻を出したまま踏み台にのって固まっているヒカルの姿。
「ああ、補助具がないのね」
と、子供用の補助トイレを棚から出し設置してヒカルを座らせる。
「ほら、出しちゃいなさい」
自分を見ても疑問に思わない母親。
(神さま…こんなサプライズいらねぇよ……)
制服がズボンだったので気づかなかった。
あるべきものがなく困惑しながらトイレを済ませ、うな垂れながら玄関に向かう。
(何でオレ女になってるんだよ………)

バスのお迎えが来た。
帰ってきたらじーちゃんちに行って佐為と会うんだ。
そう決意してとりあえず幼稚園に行くことにした。

そんな娘を見て美津子は驚いていた。
朝寝ぼけて騒いでいたところまではいい。
だがその後。
いつも朝から騒がしい娘がおとなしく着替え、眉間にしわを寄せながら朝食をとり、そしてトイレで叫んだかと思うと幼稚園バスに乗る前に「先生おはようございます」と丁寧に挨拶をしたのだ。
「大丈夫かしらあの子…体調悪くなければいいんだけど…」

おとなしく行ったのだからよしとしよう。
そう考え、洗濯物を干しに向かった。

もう一人驚いていた人物がいる。
幼稚園の先生だ。
(あのヒカル君が、いつも「おっはよーせんせー!」と元気よくバスに乗り込むヒカル君が丁寧に挨拶して歩いてバスに乗った…)
その日のヒカルはとてもおとなしかったので、皆から熱があるのでは?と心配されるのであった。

## 2．再会しました。

早く佐為の所へ行きたい……。

ヒカルは幼稚園が早く終わるように祈っていた。

「ヒカル、きょうはおそといかないの？」

幼馴染のあかりがヒカルに話しかける。

「うん。オレはいい」

「どうしたの？いつもおそとであそぶのに。おねつある？」

「ないよ。ただ考え事してるだけ」

「じゃあわたしもいっしょにかんがえてあげる！」

「おまえなぁ…」

ヒカルは鬱陶しいと思いつつ、園児相手に大人気ないことはできない。

元の世界だったら突っぱねてるだろうなぁと考えながら懐かしい姿の幼馴染と会話して時間をつぶすことにした。

「ヒカル君があかりちゃんと大人しくお話してる……」

先生の苦悩はしばらく続く。

「お昼寝とか拷問かよ……」

ヒカルの苦悩もしばらく続く――――かと思いきや体は幼児である。

割とすぐ寝ることになった。

やっと長かった幼稚園が終わり、バスで帰宅した。

「じーちゃんち行ってくる！」

母親にそう告げると急いで着替えて飛び出す。

いつもの騒がしい娘に戻った、そう美津子は安心する。
自宅から徒歩圏内の祖父の家だったが園児にはちょっときつい距離。
佐為に会いたい一心でダッシュで向かう。
「じーちゃん！お蔵見せて！」
「おお、ヒカル。遊びにきたのか？お蔵見たいのか。ちょっと待っとれ」
ヒカルの不躾な態度にも祖父の平八は孫可愛さに気にも留めない。
（じーちゃん見た目あまりかわんねぇなぁ）
お蔵の前でそんなことを考えていると鍵を持った平八が来る。
鍵を開け戸を開くと電話がかかってきた。
「ばーさんは今いなかったか。ヒカル、ちょっと電話でてくるからそこで待っとくんじゃぞ」
「うん」
平八がその場を離れるとチャンスとばかりにお蔵の梯子を上り探す。
そして目当てのものを見つける。
そこには埃をかぶっているが見慣れた例の碁盤。
緊張しながら袖で埃を落とす。
（お願いだ。神さま。これ以上わがままは言わない。会わせて）
埃を落として盤上を見ると――――。
「あった……」
虎次郎が吐いた血のシミ。
逆行する前は見えなかったシミが見える。
「～～～!!」
耐え切れず涙を流す。
「いるんだろ!?お願い出てきて!!佐為!!」
『ヒカル!!!』
出てきたのはヒカルと同じで記憶のある佐為だった。
「オレの事っ、わかる？佐為、ごめんな！会えた！佐為に会えた！」
『ええ、わかりますとも。ずいぶん幼いですけど私の知っているヒカ

ルです！』
「…なんか言いたいことたくさんあったのに、今は何も考えられねぇや…」
『ヒカル…』
会えた嬉しさで号泣して言葉にならない。
落ち着いて話がしたい、と帰ることにした。

「じゃあ佐為はあの時オレの部屋からじーちゃんちのお蔵にいたのか」
今、ヒカルは未来での自分の部屋、現在での物置部屋にいる。
ゆっくり佐為と話す場所がここしかなかったからである。
『はい。私の役目は終えたのだと、このまま消えてしまうのだと思っておりました。しかし気づいたらお蔵の碁盤の前にいました。まさか過去とは思いませんでしたが』
クスりと笑う佐為にヒカルも笑う。
『このままシミが見える者が現れるまでまた気が遠くなる長い年月を待つのか――――そう思っていたのに3日でヒカルが、まさか幼くなって現れるなんて。神の気まぐれか…ともかく感謝しています』
「オレも若返ってびっくりしてるよー」
たわいもない話。
それが二人には嬉しいことだった。
二度と会えるはずのなかった二人。
神からのプレゼントだと思うことにした。

そしてヒカルは決意する。
未来を変えると。

(佐為が消えるなんてあってなるもんか！絶対一生一緒にいるんだ

！）

碁盤がないので二人は目隠し碁をしばらく楽しんだ。

## 3．触れ合い

翌朝。

心の中で目隠し碁をずっとやっていたヒカルは寝不足だった。

美津子に起こされ、眠い目を擦りながらなんとか起き上がる。

（大丈夫、佐為はいる）

ヒカルは安心した。

『大丈夫ですか？ヒカル。ああ、すみません、私が打ちたいなどと言わなければ…』

「（何言ってんだよ佐為。オレがオマエと打ちたかったの。謝んないで）」

『ヒカルぅ～…』

再会してからヒカルはなんだか優しい。

突然の別れからわずか3日での再会となった訳だが、その間にヒカルはどう思っていたのか――。

積もる話は幼稚園から帰ってきてから、そう二人は決めていた。

『（ヒカルと会えて、またヒカルと碁が打てて嬉しいですが…昨日は碁ばかりしてあまり話せませんでしたからね。今日はいっぱいお話しましょうね…）』

「佐為～、ズボン取って～」

『取れる訳ないでしょ！もう、ヒカルったら！』

ヒカルは佐為の後ろにある園の制服を指して言って、佐為を困らせていた。

冗談だって～とヒカルは佐為の後ろに行こうとしてすれ違い――。

『『え!!?』』

二人は驚愕した。

ぶつかったのだ。

「…は？」

『…え？』
「『……』」
「『えええええ!!?』」

あれから「何をさわいでるの」と美津子にしかられてしまい、とりあえず混乱しながらも着替えを済ませる。
「（オマエ、幽霊じゃないの？）」
『いえ…他のモノには触れませんし…母上にも見えてないみたいなので幽霊だとは思いますが…ヒカルにだけ触れられるみたいですね…』
朝食を取りながら考える。
この過去の世界では佐為は何故かヒカルに触れることができる。
そんな現実に昨日から二人は混乱しっぱなしだ。
『久しぶりに…人の温かさを感じました。千年ぶりですね』
「佐為…」
「ヒカル？何か言った？」
佐為の切なく、そして幸せをかみ締める様な表情を見てヒカルはつい声に出していて慌てて「さっ、最高においしいよ！」と誤魔化すのであった。
そして食べ終え、準備も済ませたヒカルは玄関に向かう。
「（…あの子、最高においしいなんて…園児らしくない事言うわねぇ…）」
昨日から娘の様子がおかしいのを美津子は心配していた。

幼稚園ではまた自由時間などはあかりと会話して過ごす。
『あかりちゃんも小さくて可愛いですねぇ』
「（１０年前だしなぁ…ん？『も』？）」
『ヒカルも可愛いです♪』
「（嬉しくねぇ…）」
再会して二日目。
こんな他愛もない会話がとても幸せに感じている。
そしてお昼寝の時間になる。
「（佐為。一緒に寝ようぜ）」
『え？一緒にですか？』
「（うん。だって触れる事ができるんだぜ。手、繋いでよ）」
『…はい！一緒に寝ましょう！ヒカル大好き！』
「（…恥ずかしいヤツ…。うん。オレも佐為が大好きだよ。）」

（だからもう消えないで）

園から帰宅後、また祖父の家に向かう。
家に碁盤がないから買ってもらおうという魂胆だ。
「じーちゃーん」
「なんじゃ、ヒカル今日も来たのか？」
「うん！じーちゃん、オレ最近囲碁覚えたんだ。一緒に打とうぜ！」
「おお！ヒカル囲碁をやり始めたのか!?」
目を輝かせた平八はちょっと待っとれ！と碁盤を取りに向かう。
「佐為、オマエの復帰初対局だ。園児らしい碁打てよ？」
『え？私が打ってもいいのですか？』
「ああそうだ。オレはオマエに打たせたくて神さまに願ったんだ」

そう言うと目を瞑る。
この世界では影でいい。
そう、虎次郎がそうだった様に。
ヒカルは決意していた。
「佐為の凄さを皆に知ってほしい。オレ独り占めじゃ世間が可哀想じゃん」
『……ヒカル…』
ヒカルはわかっていなかった。
自身の凄さ、その素質に。
いくら佐為が毎日打っていたとはいえ、碁を覚えて1年もせずに院生になり、そして2年もせずにプロになった。
それがどれほどの偉業なのか。
家の奥から碁盤と碁笥を持った平八が出てきて縁側に並べる。
「いや～、お転婆なヒカルが囲碁の面白に目覚めるとはなぁ。孫と打てるのを夢見ておったわい。ほれ、置石なんぼでもいいから置きなさい」
「んじゃ3つ置く」
「3つでいいのか？」
「うん」
この時平八は指導碁にもなるまいと思っていた。
まだ4歳の孫の事。
ただ石を適当に並べるだけ、そう思っていた。
「(佐為。オレが加賀と筒井さんと三人で海王中の大会に出たの覚えてる？あの時のオレくらいの強さだったらあまり不自然じゃないかも。それで打てる？)」
『打てますが…ヒカルはそれでいいのですか？』
「(いいよ？佐為が打つ所が見たいんだ)」
『…わかりました。ヒカル。任せてください』
「(…ああ。ありがとう)」
佐為の復帰戦が、今日から始まる。

「ヒカル、オマエ…本当に最近覚えたのか？」
「う、うん」
内心焦るヒカル。
佐為は打てる嬉しさについつい張り切って打ってしまった。
「（佐為ー！これじゃオレ園児で院生になれちゃう強さだろー!!）」
『えへっ』
「（えへっ、じゃねぇよ！まぁいいさ。佐為の強さはこんなもんじゃないしな。なんとかするさ）」
盤上を見ながら平八は孫の才能に驚かされていた。
わずか４歳の子どもがこんなに打てるだろうか。
この子は物凄い才能があるのでは？そう考えらずにはいられない。
「じーちゃん。オレ囲碁打ちたいんだけど、家に碁盤ないんだ。碁盤買ってくれない？」
なんとストレートな言葉。
平八は家に碁盤もない少女がここまで打てるのか！と唖然する。
が、この才能をもっと伸ばしたい！とそれを了承した。
「折りたたみでよけりゃ今すぐ買ってやろう。ただし、続けるんじゃぞ？小学校までずっと続けてたら足つきを買ってやろう」
「ホント!?じーちゃん大好き！」
ヒカルは平八に抱きつく。
買ってもらうために４歳の孫娘を演じる。
孫の大好き攻撃に平八は「今すぐ買いに行くぞー！」と出かける準備を始めた。
計画通り！
ヒカルの悪役的な表情を、佐為はなんとも言えない顔でみるのであった。

## 4．今後

元ヒカルの部屋で現在の物置部屋にて、買ってもらった碁盤を早速広げる。

夕飯までのわずかな時間に少しでも打つことにする。

「やっぱ盤見ないと打った気しないな」

『石の流れを直に見るのと見ないのでは全く違いますものねぇ』

少し早碁だったが、楽しい時間だ。

「ヒカルー、ご飯だから降りてきなさーい」

美津子の声が聞こえ、夕飯をとることにした。

「（やっぱ自分の部屋がないと不便だなぁ）」

『なかなか打てないですからねぇ…。でもまだヒカル４歳ですし、しばらくご両親に甘えておきましょう』

「（うえぇ～…。風呂とかも一緒なのになぁ…）」

佐為と碁が打てるだけで幸せか、と考え直し両親の部屋にてついでに買ってもらったマグネット盤で楽しむことにした。

次の日、今日も幼稚園ではおとなしいヒカルがいた。

自由時間になり、机から動かないヒカルのそばにあかりが駆け寄る。

「ヒカル、おままごとしよう！」

「オレ碁打ちたいから」

「ご？ごってなに？」

「じーちゃんがやってるだろ？囲碁っていうんだ。楽しいんだぜ」

「たのしいの!?わたしもやりたい！」

「……（しまった。佐為と打ちたかったのに…）」

マグネットの碁盤を手に取り固まるヒカル。

『いいじゃありませんかヒカル。教えてあげたらどうですか？前の世界のあかりちゃんもヒカルの影響で楽しく打っていましたし、この年齢から始めると将来が楽しみですよ』
「(う～ん、佐為が言うなら…。あかりにも散々迷惑かけたしな。せめてこの世界のあかりには優しくしとこ)」
――――同性だしなぁ。
そう言い聞かせながらヒカルは優しくあかりに教えるのだった。

園から帰宅したヒカルは物置部屋に駆け込んで碁盤を広げる。
打ちながら佐為に話しかける。
「佐為。しばらくは我慢してくれないか？いつも我慢で申し訳ないけど…オレはまだ４歳。誰とも打たせてやることができない」
『そんな事考えてたんですか？私はヒカルと打ててそれで満足ですよ？』
「…佐為にはもっとわがままを言う権利あるぞ？前はオレが邪魔をしたんだし」
『何を言ってるんです！邪魔をしたのは私なんです！ヒカルは私の我侭を沢山聞いてくれました！』
「……佐為…」
『今、こうしてもう一度…ヒカルと会えて、そして触れられる。こんなに幸せなのにまだ幸せになれとヒカルは言うのですか？』
にっこり微笑む佐為にヒカルも笑う。
「そうだな、オレ達、また会えたんだもんな…」
『そうですよ。あ、じゃあ一つだけ我侭を。ヒカル。これからも私と打ってもらえますか？』

ヒカルの頭をなでながら言う佐為に、それは我侭になってねぇよと返し、笑いあう。
「まずは小学生まではなんとか我慢だな。前は小学校進学と同時に部屋をもらえたし、お小遣いももらえる。それまではお母さん説得して囲碁教室でも通うか？」
『囲碁教室！あの白川先生の所ですね！行きたいです！』
「（まぁ喜んじゃって…。佐為の笑顔がまた見れて嬉しいな）」
「よし、早速説得だ！」

ヒカルは美津子をなんとか説得し、次の土曜から通える事になった。
ちなみにこの説得の時、平八にも口添えしてもらっている。
「ヒカルには囲碁の才能がある！金ならわしが払うから行かせてやってもらえんか！」
と熱弁する義理の父に美津子も了承せざるを得なかった。
「最近変だと思ってたら…碁だなんて…。娘がわからない…」

夜、布団の中で一緒に寝ながら佐為と語り合う。
「（良かったな。すぐに教室通える事になって）」
『はい！本当に！そうだ、あかりちゃんも誘ってみたらどうです？』
「（あかりか…。そうだな。楽しそうだし誘ってみるか）」

そして、手を繋いだまま眠りについた。

（佐為って幽霊なのにあったかい。なんだろう、すごく泣けてくる。
佐為…）
それは何かの芽生え。

## 5．囲碁教室

翌日、幼稚園にてヒカルはあかりを囲碁教室に誘う。
ヒカルと一緒に行きたい！とあかりは了承。
帰宅後、あかりの母親と美津子が電話で連絡を取り合っていた。
「ヒカル、あかりちゃんも誘ったの？」
「うん。あかり昨日初めて囲碁したんだけど、すごく楽しそうだったんだ。オレもあかりと打ちたい」
「そう…。あかりちゃんがいいならそれでいいんだけど…」
なんとも言えない顔をする母親見て苦笑してしまう。
さすがに４歳児が幼馴染誘って囲碁教室はないよなぁと思うが、佐為のため。
佐為の言うことを少しでも聞いてあげたい。
そして正直あかりといる時間は心が落ち着いている。
ヒカルはそう考えながら日課になりつつある物置部屋に直行し、佐為と打つ。

「いよいよ明日だな。囲碁教室。佐為、手加減して打ってくれよ？でないとオレ神童とか言われちゃうぞ。神童ヒカル。うわ、ダジャレかよ」
『クスクス。神童ですか、面白そうですね』
「やめてくれよ～」
頭を抱え込むヒカルに佐為は笑い、そんな佐為を見てヒカルも笑う。
続きを打ちながら明日を楽しみにする二人だった。

土曜日、ヒカルとあかりは平八に連れられて囲碁教室に来た。

「こんにちは。白川といいます。ヒカル君とあかりちゃんだったね。どうして碁に興味を持ったの？」
（白川先生変わんないなぁ。あの時と同じ事言ってる！）
「わたしはヒカルにおしえてもらってようちえんでうったの！しろとくろをならべていくのおもしろかったから！」
「へぇ、あかりちゃん、ヒカル君に教えてもらったの？ヒカル君はおじいさんに教えてもらったのかい？」
「ううん。えーと、テレビで見て面白そうだなーと思って。新聞とかに載ってる碁のコーナー見て覚えた」
『ヒカルの嘘つき』
「（おかげさまで）」
　ヒカルと佐為は顔を見合わせて笑う。
「先生、この子は才能があります。わしは町内大会で優勝する実力なんじゃが、３子置かせて打ったらわしが負けたんですわ」
「３子で勝った？４歳の子が？」
「そうなんです。確かに最初は指導碁でもしようとしたが、途中からは本気になって――――いくら置石ありとはいえわしに勝った。とんでもない才能の持ち主だと思うんですわ」
「……ヒカル君。本当にテレビと新聞だけ見て覚えたのかい？」
「うん。そんで打ってみたくてこないだじーちゃんと打ったんだ！」
「……今から僕と打ってみようか」
「いいの！やったぁ！」
　４歳児らしく演技をして碁石を持つ。
「あかりちゃんは今から打つのを見ていてくれるかい？」
「はーい！ヒカルがんばってね！」
「おう！先生、置石３つでもいい？」
「いいですよ」
　ヒカルは拙い手つきで石を置いていく。
　それを期待した目で見る平八とあかり。
「（佐為。手加減して打てよ？）」
『はい！でもいいんですか？私が打って』

「(前にも言ったろ?オレは佐為の打つ碁が見たい。オマエをもっと知ってもらいたい。佐為の凄さを秘密にしておきたくない)」
『…わかりました。では遠慮なく打たせていただきますね』
「(オレには遠慮なくていいけど今は手加減だけは忘れるなよ~)」
先日の平八との対局を思い出し佐為に釘を打つ。
『なるべく頑張ります♪』
「(佐~為~…)」
そんな二人のやり取りを知る由もない白川は、白石を盤上に打った。
「(行くぜ!佐為!)」
『はい♪』

「…ここまでにしようか」
30分も経たずに白川が声を発する。
まだ序盤も序盤なのに驚いて白川を見つめる。
「ヒカル君。君は凄い才能を持っている。よかったら僕がいるプロの研究会に来ないかい?」
「えっ」
突然の誘いに驚愕するヒカル。
だってそうである。
ヒカルはまだ4歳なのだ。
今の碁も佐為はかなり手加減して打っていた。
例えるなら棋力は中一の囲碁部の大会の時のヒカルほど。
だからまさか研究会に誘ってもらえるとはヒカルも佐為も思っても見なかった。
動揺して言葉を発せずにいると、祖父が興奮した様子でヒカルを撫でる。
「すごいじゃないかヒカル!プロの集まりに呼んでもらえたんだぞ!」
「ヒカルってすごいの?」

「ああ、あかりちゃん。ヒカルは凄いんだ！」
「わぁヒカル！よかったねぇ！」
「う…うん」
　ヒカルは戸惑った。
　小学生になるまでは大人しくしているつもりだったから。
　それが白川のいる研究会に誘ってもらえたから。
「（佐為、どうする？）」
『ヒカルが良いのでしたら是非行きたいです！』
「（わかった）…先生、よろしくお願いします。あ、でも教室も来ていい？あかりと打ちたい」
「もちろん。ヒカル君がいいのなら」
「あかり、毎週一緒に教室いこーな！」
「うんヒカル！」

　次の火曜日、棋院で行われる研究会に参加することに決まった。

「思ったより早く研究会に参加できたな～」
　囲碁教室から帰宅後、日課になった物置部屋での佐為との対局を開始する。
『そうですねぇ。ふふ、ヒカルも嬉しそう』
「そりゃこんなに早く先生達に会えるからな。和谷ってもう先生の弟子なのかな。５歳の和谷か、想像できねぇ」
　クスクス笑い合う。
「今のうちに外堀を固めていけば、プロになる時にお母さんもうるさく言われないだろうな。オレがプロの研究会に行く事になったってじーちゃんが色々広めてたし」

『前の時はヒカルが何も言わなさすぎだったんですよ～』
「確かに…。今回はちゃんとお母さんに伝えていこう…」
一度打ち終え、碁石を碁笥に片付ける。
「しかしよく考えたら４歳児の打つ碁じゃねーな。まぁいいか」
『神童でいいじゃないですか。楽しみましょうね！』
「ああ！」

美津子に怒られるまで二人は対局を楽しんだ。

# 6．ヒカルと佐為の人生

火曜日。
ついに研究会に行く日になった。
棋院までは平八が送っていく。
「（やっとこの日がきたな！）」
『はい♪力をせぇぶ、力をせぇぶ…』
前日にヒカルと色々打ち合わせをし、研究会へ向かう。
案内された先では森下・冴木・都築がいた。
「（わっ、冴木さん若い！まだ９歳か！）」
『森下師匠（せんせい）の皺も少ないですよ』
「（ホントだ！笑ってしまう…）」
そんな笑っているヒカルを見て白川はこの子は大物になる、と考えていた。

「じゃあヒカル君、ご挨拶してもらえるかな？」
「はーい。進藤ヒカルです。４歳です。好きな食べ物はラーメン！よろしくお願いします！」
無邪気な笑顔で自己紹介をする。
「（ふふふ、ちゃんと４歳児に見えるだろ）」
『…そうですね（１４歳の時とかわらない…）』
佐為は言葉を飲み込んだ。
「ヒカル君か。俺は森下だ。白川君から聞いている。さっそく打とうか」
『はい！対局対局♪』
「（佐為～、手加減して打てよ～）森下せんせー、お願いします！」
森下との一局が始まった。

「キミは本当にテレビと新聞で碁を覚えたのかい？」
３子を置いての指導碁の途中、森下はヒカルに尋ねる。
「うん。テレビでやってて、すごく面白そうで、オレもやりたくてずっと頭の中でやってたんだ。でも一人じゃつまんないからじーちゃんとこないだ初めて打ったんだ。そしたらじーちゃん碁盤買ってくれて、おうちで今打ってるんだー！」
その言葉に白川以外が驚愕する。
つい最近まで碁石に触ったこともない幼児が、ここまで打てる事実に。
「どうでしょう森下師匠。聞くところによると、先週水曜日に初めて対局し、まともな対局は今日で３回目だそうです」
「３回目!?キミ天才だ！毎週ウチで勉強しなさい！」
「いいの!?やったー!!」
『やったー!!』
研究会に毎週参加が決定した事で小躍りして喜ぶ佐為。
それを見てヒカルも喜ぶ。
「（まだオレが４歳だから突然強くは打てないけど、どんどん打とうぜ！佐為！）」
『はい♪また碁がこんなに打てる。なんと嬉しい事か…』
「（佐為…）」
前回は自分ばかり優先して佐為に打たせず、そして消してしまった。
そんな後悔がヒカルに圧し掛かる。
「（佐為。オマエは本因坊だ。本因坊佐為。目指すぞ！）」
『ヒカル』
『（――――ヒカルはこんなに私の事を考えてくれている。だけど私は？ヒカルに何をしてあげれる？）』
ヒカルの人生を奪ってしまった。
佐為は考えてしまう。
ヒカルにすべてを託して自分は成仏したのではないのか。

だけどその後のヒカルはどうなったのか。
その事を佐為は詳しく聞いていなかった。
『(ヒカル。私はヒカルのために打ちます。ヒカルの笑顔が絶えない様に)』

佐為は決意する。
ヒカルが望むなら。
ヒカルのためだけに。
佐為にとってヒカルは自分の全てなのだから。
もう二度と、ヒカルを悲しませたくない。

帰りは白川に送ってもらい、今回の研究会は終わった。

『ヒカル、私はヒカルに何をしてあげれますか?』
そんな唐突な質問にヒカルは頭の上にクエスチョンマークがついている。
『私はヒカルの人生をもらっています。でも私はあげれるものがない。私はヒカルに何かしてあげたい!』
前回は我侭ばかり言ってヒカルを困らせていた。
そして今回は自分に全て打たせてくれる。
そんなヒカルにお礼がしたい。
「なんだ、そんな事か。オレだって佐為の人生もらってんだからおあいこじゃん!」

『ヒカルは生きています！死んだ人間が…ヒカルの人生を狂わせてしまう…』
「まだそんな事考えてたのか？大丈夫、他のヤツに見えなくても佐為は生きてるよ」
　そう言うと佐為に抱きつく。
「佐為あったかい。冬は湯たんぽだな」
『ヒカル…』
「まーだ困った顔してら。わかった！じゃあ絶対オレの前から消えない事！……オレの願いはそれだけだ」
　泣きそうな笑顔で佐為を見るヒカル。
　佐為は知らない。
　前回、ヒカルが佐為に会いたくて大泣きした事を。
　秀策縁の地を巡った事は聞いていたが、大泣きして佐為を求めた事は知らなかった。
『わかりました。ずっと一緒です。神が許す限り、ヒカルと一緒にいます』
「神さまだってオレが死ぬまで許可するさ！だってオレ達、また会えたんだ！二度と会わせる気がないなら、過去になんてこねーよ！」
『そうですね！はい！ヒカルのぷろぽおず、受け取りました！』
「…は？プ…プロポーズ!!?なんでそんな言葉知って…！てかそんな意味で言ったんじゃねぇよ！」
『顔を真っ赤にしちゃって…ヒカル可愛い!!』
「佐為のばかー！もうっ、打つぞ！」
　その場をごまかすために碁盤を広げる。
『（ありがとうヒカル。ヒカルの人生、いただきます）』

　佐為は吹っ切れる。
　この身はないけれど、ヒカルのために。

ヒカルは自分と佐為のセリフに困惑していた。
プロポーズのつもりはなかった。
だが傍から見たら完全にプロポーズである。
赤面はまだ治まらない。
（確かに一生そばにいてほしいけど、男同士でそんな事…ってオレ女じゃん！）
混乱したまま打った碁はとても酷いものとなった。

『からかってすみません…』
「いや、オレが考え事してたのが悪い…」
「『……』」

気まずいまま一日が終わった。

## 7．自覚？

ヒカルは多忙になる。
平日はもちろん幼稚園。あかりと毎日打っている。
火曜は研究会に参加、土曜は囲碁教室。
平八とも時間が合えば打っている。
それ以外、ほとんど佐為と打っていた。

そんな生活が約2年続き、ついにヒカルは小学生になった。

「森下師匠（せんせい）、オレ院生試験受けたい」
ヒカルの言葉に一同騒然である。
それぞれが「小学1年生で院生か、最年少記録更新か」と口にする。
研究会で誰一人としてヒカルが落ちると思っていない。
それほどヒカルの才能に皆将来を楽しみにしているのだ。
「ヒカル君が院生か…。オレも受けようかな…」
11歳になった冴木も迷っていた。
5歳も年下の子に棋力は完全に負けている。
でもその持ち前の優しさからか、悔しさはあってもそれ以上にヒカルを尊敬していた。
そんな冴木の囲碁の姿勢に森下も大丈夫だと太鼓判を押す。
そうして7月期の院生試験を二人は受ける事になった。

「佐為は本当に凄い。なにより碁がキレイなんだよな」

『そうですか？ふふふ、ヒカルに褒めていただいて嬉しいです♪』
「塔矢も言ってたよな。美しい碁。見ていて感動する」
『ヒカル…』
小学生になり、一人部屋をもらったヒカルはそこで寝るまでずっと佐為と打っている。
囲碁ばかりする娘を美津子は心配しているが、この世界ではプロになるという布石を打っている。
二度目の小学生だからか成績もそんなに悪くないヒカルはあまり美津子にとやかく言われないでいた。
『ヒカル、あなたの碁も美しいですよ』
「オレの碁が？ホント？佐為にそう言ってもらえるとなんか照れるな…」
『本当です。だって私の弟子ですもん♪』
「プッ、笑わせんなよ～！」
『ふふふ』

「ヒカル～！何騒いでるの～！お風呂入るわよ～！」

笑いあっていると一階からヒカルを呼ぶ声がする。
今までヒカルは毎日美津子と風呂に入っていた。
前の世界でもそうだったが、ヒカルは成長が大器晩成型でありとにかく小さい。
だがそろそろ一人でゆっくりと入りたいとヒカルは考えていた。
「お母さん、オレ今日から一人で入る」
「…え？」
「もう小学生だしそろそろ一人で何でもできないと」
…と、階段を下りながら美津子に伝える。
２年ほど前、囲碁にはまりだしてからヒカルは母親である美津子に甘えなくなった。
突然大人しくなり当時は困惑したが、手のつけられないくらいお転婆だった娘がおしとやかになったのだと思いさほど気にしなかった。

だが唯一甘えていたのがお風呂である。
大人しい娘と一緒に入るお風呂は美津子の楽しみでもあった。
「そ…そう？何かあったら言いなさいね。先に入る？」
「うん。シャワーに手が届かなかったら呼ぶね」
「ふふ、行ってらっしゃい」
笑顔で見送ったが、その後肩を落として夫である正夫に「ヒカルが甘えてくれなくなった」と愚痴りに行くのであった。

前世から勝手知ったる風呂場。
だがサイズが全く違う。ヒカルのサイズが。
今のヒカルは平均身長よりはるかに小さい１０３センチメートル。
気合を入れて脱衣所に向かう。
『ヒカル！頑張って下さい！』
「おう！……んじゃいつも通り目隠ししてね」
『え？ヒカル？どうしてですか？』
佐為は過去に戻ってきてからお風呂の時間は目隠しをしていた。
ヒカルが美津子と入っていたからである。
前は一緒に湯船につかる（もちろん佐為は服を着ていたが気分的に）間柄だったから今回もそうしようと考えていた。
『……？ヒカル？』
不満そうにするヒカルに佐為は自分が何か仕出かしてしまったのかと慌てる。
「佐為のスケベ」
まるで背後にガーンという文字が入ったかの様な衝撃を佐為は食らった。
『わ…私が助平ですと…!?何故です!?以前は一緒に入ってたじゃないですか！』
「…オマエ、まさかこの２年間気づかなかったのか…？」
『何がです!?は!?まさか…』
「…（やっと気づいたのか…）」
ため息をつくヒカル。だが次の佐為のセリフに――

『私が男の子のお風呂を除く不埒なヤツだと思ってたんですかー!?』

――おもわずずっこけてしまう。

確かに外見は男の子だ。

完全に以前のヒカルがただ小さくなっただけなのだ。

だがいくら何でも2年気づいていなかったのかとヒカルに怒りがフツフツと沸いてきた。

「佐為。言わなかったのは悪いと思う。でもな…さすがに2年近く経ってるんだ…。いい加減気づけ!オレは女なんだぞ!!」

『……え?』

幸い、ヒカルの怒号はテレビをつけた部屋にいる両親には聞こえていなかった。

『ヒッ、ヒカルが女の子〜〜〜!!?』

もし佐為が生きていたのならその叫びはご近所中に響き渡っていたであろう。

顔を真っ青にしていたかと思うと突然赤くなる。

『すみませんヒカル!女子(おなご)に私はなんてことを!』

赤面して慌てる佐為がおかしくてヒカルの怒りが消えていく。

「もーいいよ。まあ外見は以前とかわんないし。とりあえず、目隠ししてくれる?」

『はっはい、もちろんです!』

佐為が目隠ししたのを見て思わず「プッ」と笑ってしまうヒカルだったが、早めに入浴しようと服を脱ぐ。

(あれ、いつも服脱ぐ時には何も感じなかったけど、なんか今ものすごく恥ずかしいぞ)

そんなヒカルもしばらく赤面が続いていた。

そして早めにシャワーをあびる。

『(ヒカルが女子(おなご)…？私はずっと女子(おなご)と寝ていたのか――――)』

脱衣所で赤面した頬を押さえて混乱する佐為。

毎日手をつないで寝ている事を思い出しまた一段と赤面する。

『(いや、ヒカルはまだ6歳。子ども。何も動揺する事では――――)』

『そうですね！はい！ヒカルのぷろぽおず、受け取りました！』

以前自分が言った言葉を思い出し、ついに頭をかかえて丸まってしまう。

『(あの時のヒカルはすごく動揺していて…ただ照れているだけだと思っていたが…私が余計な事を言って…)』

そこまで考え、佐為は思考が停止する。

もう余計な事は考えまい、そう自分に言い聞かせた。

お風呂上りのヒカルと一局打つ。

『ヒカル、強くなりましたね。院生試験ヒカルが受けてみませんか？』

「いや、オレは佐為みたいに手加減して打てないし…。言ったじゃん。オレはいいの。佐為に打ってほしいの」

『…同じです』

「え？」

『私もヒカルと一緒で、皆にヒカルの碁を見てほしいんです』

佐為の言葉に困った顔をするヒカル。

『そうだ、いんたぁねっとで打ったらどうです?』
その提案に少し考えるが却下である。
「この時代のインターネットはまだそんなに普及してない。まだネット碁ができる時代じゃないんだ。ネットカフェもないんじゃないかな」
『そうですか…』
「もう少し大人になってからだな。ひとまず院生試験頑張ろうぜ」
『わかりました!それまで頑張ってもっと強くなりましょうね!』
「お~!」
片手を挙げて笑うヒカルに佐為は見惚れた。
女と意識してヒカルを見ると完全に女の子にしか見えない。
多分それは佐為がヒカルを意識した瞬間である。

今までは気にしていなかったが、よく見るとヒカルは可愛い。
一見普通の男の子だが、美少女である。
残念な言葉遣いとラフな格好で完全に世間には間違えられているが。
「そういえばなんでランドセルの色で気づかなかったんだよ」
『あまり気にしていませんでした…』
「(囲碁馬鹿だから…)」
『聞こえてますよ』
部屋の電気を消し、布団に入る。
「佐為、寒い。湯たんぽ」
『…はいはい』
毎日の事だが、ヒカルは佐為にくっついて寝ている。
それは冬でも夏でも関係なく。
佐為は今はまだ照れているが『可愛い』とだけで治まっている。
そしてヒカルを女の子として多少意識をしてしまった佐為にとって、今後地獄になっていくであろう。

一方、ヒカルはこの2年で自分が女の子という自覚がやっとできてきた。
言葉遣いはこの先このままであろうが、意識は変わってきた。
そして自分が佐為が好きだと自覚し始めていた。

（こんなにも佐為に依存している。佐為がいないとダメだ）
佐為が消えてしまわないか不安でくっついて寝てしまう。
（優しい佐為。ずっとそばにいて。願わくば、佐為も同じ気持ちであります様に…）

## 8．会いに行く

「師匠、昨日おかあさんと志願書書いたんだけど、これで大丈夫？」

院生試験を受けたいと伝えた次の週、志願書を持ってきたヒカルが森下に尋ねる。

以前から小学生になると院生試験を受けようと考えていたヒカルは平八に相談していた。

そして平八の説明と説得により、美津子と正夫は院生がどういうところであるのか、娘がどういう道に進もうとしているのか理解した。

若干6歳のヒカルの決意に両親も応援することにした。

「ヒカル君もう書いてきたのか。どれどれ…うん、大丈夫だね。…ん？」

6歳なのに意外とキレイな字を書くなぁと考えながら志願書に目を通した森下は記入ミスを見つける。

「ヒカル君、ここ、間違ってるよ」

「え？昨日何度も確かめたのに…どこ？」

「ほら…ここだ」

森下が志願書の一部分を指さす。

そこは――――。

「……」

「？ヒカル君？」

普段は6歳児には見えないほど落ち着いていているヒカルが頬を膨らませて怒っている。

そんな様子に森下と門下生は首を傾げる。

そしてそんなメンバーを見渡したヒカルはため息をつき、佐為は自分もそうだったからしょうがないと思っている。

森下が指した先、それは女に丸がつけられた性別の欄であった。

「師匠……。見た目こんなだし言葉遣いも悪いけど…オレ、一応女なんで」

ヒカルの発言にどのくらいの沈黙が流れただろうか。
全員が口を大きく開けてぽかーんとしている。
「えええ!!?ヒカル君女の子だったの!?」
一番最初に声を発したのはヒカルが来るまで最年少だった冴木だった。
その発言を皮切りに一同が驚きの声を上げる。
「ごごごごめんね!?てっきり男の子だと…!」
「まさか女の子とは…」
「一人称がオレだったから男の子だと思ってた…」
「今度からヒカルちゃんって言わないといけないね…」
散々な言われ様である。
慣れてるとはいえやはり2年近くも男の子と思われていたのは切なくなる。
ヒカルはジト目で皆を見る。
「ちゃん付けで呼ばれるのむず痒いから、今までどーりでお願い」
ため息をつきながら答えた。

その日の研究会は気まずいまま終了した。

「もー!!皆も佐為もひどい!!オレ女なのに!!」
『ヒカルぅ…だったらもっと言葉遣いをお淑やかに…』
「14年以上男だったんだぞ!今更言葉遣い変えられねーよ!」
『でも2年も女の子生活続けてるでしょ?』
「……う~。今更私なんてむず痒すぎる…。無理!オレはオレだから

いーの！」
『えええ～…』
恒例の部屋での佐為との対局中の会話である。
文句いいながらもさすがは二人、まるで高段者の対局だ。
現在のヒカルの実力は前の世界の白川と並ぶ程。
メキメキと力をつけてきている。
それが佐為には嬉しい反面、もったいないと思っていた。
だがヒカルは自分は打たない、影でいる、と決意が固い事を今更変えられないとも知っている。
『（もったいない…。ヒカルは以前の塔矢アキラより強い。…塔矢アキラ。今頃彼は…？）』
「ん？どうした佐為？」
『ヒカル、塔矢アキラはこの世界で何をしているのでしょう？』
「塔矢か…。そうだな…。何してんだろ…」
考え込む二人。
ふと佐為が提案する。
『院生試験を受ける前に塔矢アキラに会ってみませんか？』
「え？何で…？」
正直なところヒカルは後ろめたかった。
塔矢と最後に会ったのは塔矢名人の入院先の病院である。
ｓａｉと打たせろと緒方に詰め寄られた時に鉢合わせたキリだ。
以前は生涯のライバルなんて言っていたが自分は佐為を追って過去に来てしまった。
この世界の塔矢とは別人だとは思っていても顔を合わせづらい。
そんな揺れる気持ちを佐為は気づいていた。
『ね、いいでしょ？以前の囲碁サロンに行ってみましょうよ♪』
「ん～…佐為が言うなら…」
ヒカルが断れない事を知っていてお願いする佐為。
佐為のおねだりには弱いのだ。
土曜日、囲碁教室が終わってから行くことにした。

「ええ～と、ここ？」
「そうそう。んじゃここに置いたら？」
「こっち？」
「正解！あかりすげーじゃん！」
囲碁教室にてヒカルはあかりに詰碁を出していた。
ヒカルと違いあかりは前世の記憶など持ち合わせていない。
そんな中ヒカルにくっついて全く知らなかった囲碁を覚えている。
ちょっと難しい詰碁も答えれるくらいにあかりもメキメキと力をつけてきた。
それは佐為と毎日という程打っているからなのであるが、前世から考えると考えれない事だった。
「うん。あかりちゃんもだいぶ力をつけてきたね。僕と一局打ってみようか？」
「先生と!?うん！打つ～！」
笑顔で答えたあかりに白川も微笑み返す。
（ヒカル君は女の子なんだからお友達も女の子なんだと何故気づかなかったんだろう…。いやあかりちゃんと並んでいると完全にヒカル君は男の子なんだよ…）
そんな失礼な事を考えながら。

「（なぁ佐為。あかり前より強くなってねぇ？）」
『そうですね！あかりちゃん、すごく筋がいいのかも…』
「（……あかりも勉強したら院生行けるな…）」
『確かに。囲碁を覚えて2年でこれだけ打てるなら後何年かすれば』
「（だろ？あかりすげーよ！）」

笑顔で白川と打っているあかり。
その内容は指導碁だがとてもいい。
そして佐為が指導碁をしているからか、佐為の打ち筋に似ている。
それを見てヒカルは佐為がまたこの世によみがえったと喜んでいる。

『ヒカル、あなたも凄いのですよ――――』

佐為のつぶやきはあかりの対局に夢中になっているヒカルには聞こえなかった。

囲碁教室も終わり、佐為とヒカル、そして何故かあかりも塔矢名人経営の囲碁サロンの前にいる。
二人は手をつないでいて、傍から見ると初々しいカップルだ。
そうじゃなければ姉と弟。
女の子のお友達同士には全く見えないのが残念である。
気にせず向かい、自動ドアが開く。
「あらこんにちは。可愛いカップルね。いらっしゃい」
受付の市河が答える。
「(うわー、受付のねーちゃん若い…)」
『塔矢行洋の病室以来ですもんねぇ…』
じろじろと自分を見る子どもに市河は頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。
「(…て、カップル…。まぁいいか…。元男だし…)」

『（かっぷるとはなんでしょう…。聞いたらヒカルが怒りそう…）』
「ここに名前を書いてね。ここは初めてかな？」
「うん。初めてだよ。あ、打つのオレだけで、隣のこの子は見学だけどいい？」
「大丈夫よ。キミ棋力はどれくらい？」
「え…棋力…？（佐為、オレってどのくらいになるんだろ？）」
『私に聞かれましても…』
「えーと、今度の院生試験受けるくらい…」
「えっ」
市河が驚く。
それはそうだ。
目の前にいるのは明らかに幼児。
まぁヒカルは小学生なのだが、背が低いせいでまだ幼児に見える。

「ヒカル！男の子がいるよ！」
ふとあかりが声をあげる。
あかりが指す方向を見ると、そこにはアキラがいた。
「塔矢…」

この世界に来て、初めてヒカルとアキラは出会った。
前世とは違う人生を進んでいるヒカル。
以前より早くめぐり合う事でアキラの人生もここから変わるのだが、そんなことをヒカルも佐為も気づいていなかった。

# 9．アキラとの対局

「塔矢…」
思わずつぶやいてしまった、かつてその背を追っていた人物の名前。
いてほしくなかった。
会いたくなかった。
……会ってしまったら。
アキラを見つめて顔を強張らせるヒカル。
かすかに震えている。

『(…打ちたいのですね、ヒカル……)』
佐為は気づいていた。
ヒカルがアキラと打ちたいと思っている事を。

ヒカルのつぶやきがアキラに聞こえていて、ヒカルの元に歩いてくる。
そして前の世界では考えられないくらいフレンドリーに話しかけてきた。
「こんにちは。ボクのこと知ってるの？」
「…知ってるよ。塔矢先生の息子って有名じゃん」
震えが止まったヒカルも答える。
その表情は、とても切なく見える。
自分が打ちたい、なんて思ってはいけない。
佐為はヒカルから流れてくるそんな感情に悲しそうな顔をする。
「ヒカル、この子とーやくんって言うの？」
あかりの声にはっとなる。
「ああ。今日本の囲碁界で一番強い塔矢名人の息子だよ」
「へぇ～。あ、わたし藤崎あかり！よろしくねとーやくん！」
「塔矢アキラです。よろしく、藤崎さん。…えと、キミは…」
「…進藤ヒカル。よろしく」

『藤原佐為です！よろしくお願いします♪』
何故か佐為も挨拶をする。
しかもアキラの頭を撫でつつ『いい子いい子』と言いながら。
「（……佐為…塔矢を撫でるのやめろ…）」
衝撃の絵図に笑うのを必死で抑えて別の意味でヒカルは震える。
『皆小さくて可愛いです♪』
「（確かに前からは考えられねーけどさ…）」

「とーやくん何年生？わたしたち1年生だよ」
あかりのほんわかした質問で別の意味で笑みが出る。
「ボクも同じ1年生だよ！」
アキラも笑顔で質問に答える。
「ねぇ、わたしヒカルと白川先生としか打ったことないの。とーやくんわたしと打って！」
「うんいいよ！一緒に打とう！（白川先生って誰だろう…）」
二人は奥の席に移動した。
ヒカルは受付の市河に「ごめん、オレ見学であいつが打つのでも大丈夫？」と聞いて了承を得、ヒカルと佐為が見守る中あかりが3子を置いて打ち始めた。

――――やっぱり世界は変わっても、塔矢なんだな。
あかりに対して指導碁を打つアキラ。
この頃のアキラはヒカルが知っている強さには程遠いが、それでもあかりよりはるかに強い。
その打ち筋はやはりアキラであった。
だが決定的に違ったのが、その姿勢だ。
この頃のアキラは周りにライバルらしいライバルがいなかった。
いるのは年上の塔矢門下で一番年が近いのが7歳上の芦原だった。
ちなみにこの頃の芦原は院生である。
すこしつまらない…そう思ってた時に明るい同い年の子が来て一緒に楽しく打っている、その事実がアキラを奮い立たせていた。

今までアキラは年の近い子からは勝手にライバル視され、そして打つと絶望して去っていく、そんな事しかされていなかった。
こんなに楽しそうに碁を打つアキラを見てヒカルはちょっと驚く。
「(あかりってすげーな。あの塔矢に終始笑顔で語り合いながら打ってる)」
『塔矢も本当は素直ないい子なんですよ。ヒカルが生意気な事言って怒らせるから…』
「(う…あの頃は塔矢に本当に悪かったなぁ…って、だからいい子いい子すんなって…)」

「あーん、2目足りなかった~!」
「ありがとうございました」
「ありがとうございました」
あかりの2目負けで終わった。
二人は終始楽しかった対局の検討をする。
「ここはこっちに打った方が全体が見やすいと思うんだ」
「そっかぁ!とーやくんすごいね!」
「そ…そうかな…」
「(塔矢が照れてる…)」
和気藹々、そんな光景がヒカルを混乱させる。
以前はアキラが佐為を追ってきた。
そして自分がアキラを追う、そんな図だった。
いつからか、アキラがヒカルを気にしだす様になったのは。
この世界ではどうなるのだろうか?
またアキラは佐為を追いかけるのだろうか…ヒカルはそんな複雑な思いだった。

「キミは打たないの?」
「ふぁえ!?」

アキラに話しかけられ、考え事をしていたヒカルは素っ頓狂な声を上げる。
「…えと、よかったらボクと打たない？」
「あー、一人分しか席料払ってないから無理だよ。お小遣いなくなったもん」
「えっ！ヒカルごめんね！わたしが打っちゃった…。今度のおこづかいでヒカルにお金かえすね！」
「別にいいよ。あかりと塔矢の対局見れて楽しかったし」
そんな会話を聞いたアキラは受付の市河の下へ行き、一言二言告げた後ヒカル達の所へ戻ってくる。
「お金いいって。だから進藤くん？ボクと打とうよ！」
「え、いいの？」
市河の方を見ると両手で大きな丸を作って笑顔で答える。
「それじゃあ…一局だけ。互戦で」
ヒカルの言葉にアキラは「またこの子も…」と思う。
勝手にライバル視され、勝手に絶望して帰っていく。
そんな同年代を何人も見てきた。
だからヒカルの事もそんな人たちと同じだと考える。
それは今まで自分がされてきた様に勝手な考えなのだが。
「ヒカルはつよいんだよ！こんど〝いんせい〟受けるんだよ！」
「え…院生!?」
目を見開いてヒカルを見つめる。
アキラは自分がまだ院生を受けるまでは力が足りないと考えていたのだが、目の前のヒカルは受けるという。
という事は棋力は高い、ということだ。
「進藤くん、こんどって…6月のしけん、受けるの？」
「うん。オレの師匠（せんせい）にも志願書見てもらってこないだ出した」
「せんせい？進藤くんのせんせいって誰？」
「森下九段」
その言葉を聞いてアキラは確信する。
九段の門下で、その九段が推薦するならだいぶ棋力が高いという

事。
アキラは先ほどの考えを恥じた。
そしてあかりとは違ったワクワク感を持った。
「打とう！ボクがニギるね！」
「うん。……オレが白だ。お願いします」
「おねがいします」
あかりが笑顔で二人を見つめる中、対局が始まった。

「（佐為、一手目は？）」
『ヒカル。あなたが打ってみませんか？』
「（はっ!?何言ってんだよ！オレは打たないって言ったじゃねーか!!）」
『この対局はヒカルが打つべきです。私では駄目です。以前と同じになってしまいます』
「（同じじゃねーよ！ずっと佐為が打つんだから、オレでしゃばらないから！塔矢がずっと追ってたのは佐為だから、打たせてあげれなかったから、佐為…）」
『ヒカル、結局塔矢が見ていたのは私ではなくヒカルだったんですよ。プロ試験の時、わかったでしょう？』
「……」

前世でのプロ試験。
それは越智の後ろに見えていたアキラの存在。
佐為を追っていたアキラはいつの間にかヒカルを捕まえようとしていた。
「…？進藤くん？」
いつまで経っても打たないヒカルにアキラが声をかける。
「（…この一局だけだからな。佐為の弟子として、佐為のために打つ）」
『ヒカル』
そうではない、そうではないのだ。

声を出したかったがヒカルは対局に集中すると周りが見えなくなる。
諦めて盤上を見る佐為。
そこには――――。

「ありません」
「ありがとうございました」
ヒカルの中押し勝ちだ。
だがその内容は、とても美しく負けたほうも自慢できる内容であった。
対局時間は6才児にしては長く、3時間近く経っていた。
「進藤くん…すごい！ボク、同い年でここまで打てる人初めて会ったんだ！またボクと打ってくれる!?」
興奮してヒカルに襲い掛からんばかりの勢いで問いかける。
「うーん。オレあんま時間ないからなぁ。時間あるときだったらいいけど…」
「時間？」
「こう見えて忙しいんだよ…。囲碁教室ももうすぐ辞めるし、ここまでなかなか来れない」
「だったらボクがそっちへ向かう！」
「そこまで…？」
ふと前世のアキラの猪突猛進さを思い出すヒカル。
他校に乗り込むくらいのバイタリティ。
懐かしく思って苦笑してしまう。
「でもオレ院生受けるし、やっぱそこまで時間とれねーよ」
――――時間ある時は佐為と打ちたいんだけど。そう心の中で思う。

その思いが伝わった佐為は嬉しい様なもったいない様な、複雑な心境だ。

そしてアキラが爆弾発言をする。

「だったらボクも院生試験受ける!!」

「『……えええええ!!!?』」

前世とはあまりにも違った人生に、ヒカルも佐為も慌てる。

そんな二人の心情を他所に、アキラは鼻息が出そうな勢いで興奮しているし、あかりはどこか楽しそうだ。

「(…塔矢、ごめん。またお前の人生狂わせた)」

ヒカルは心の中でアキラに謝るのであった。

# １０．いつの間にか

アキラの問題発言から1ヶ月。
院生試験を受ける直前になってヒカルは何故か塔矢家にいた。

――どうしてこうなった？

事の始まりは5月の終わり。
それは囲碁教室ラストの日。
教室には殆どが定年退職後の人ばかりで、小1のヒカルとあかりは皆の孫の様に可愛がられている。
ヒカルが院生試験を受ける事、もう教室でのレベルアップは難しい事を白川が皆に説明をし、〝囲碁教室の孫〟の片割れが辞めるという事で簡単な送別会をやっていた。
「ヒカル君なら絶対受かるわ！」
「ボウズなら大丈夫だ！頑張って来い！」
「寂しくなるわねぇ～」
皆口々にヒカルに別れの挨拶をする。
相変わらず男の子に間違えられているがヒカルが気にする素振りもなく「皆ありがとう！時々遊びにくるね！」と挨拶を返す。
皆からもらったお菓子類を手にしたヒカルはホクホク顔であかりと一緒に囲碁教室を後にし、数歩進んだ所で声をかけられる。
「進藤くん！」
「あれ、塔矢じゃん」
「とーやくんだ。こんにちはー！」
「こんにちは！」
「ちは～」
隣にいるあかりにワンテンポ遅れて挨拶するところがアキラらし

いと思いつつ挨拶をする。
「どうしたんだよ塔矢。何か用？」
「もう、ヒカルったら。せっかくとーやくんが来てくれたのに。どうしたの？」
　ヒカルのそっけない態度に少しうろたえたが、あかりが笑顔で聞いてくれたので安心するアキラ。
　同年代で友達と呼べる子がいなかったアキラは二人と仲良くなりたいと思っていた。
　それは囲碁友達がヒカルしかいないあかりも同じである。
　ヒカルはアキラと出会うのが早すぎたと肩を落としていた。
「（また塔矢に「逃げるな！」とか「ふざけるな！」とか言われるのか…）」
『ヒカル、そうとは限りませんよ？今回はヒカルが失礼な事を言っていないので塔矢も友好的ですし』
「（その節はご迷惑をおかけしました）」
『あの時の牙を剥いた塔矢に噛み付かれました』
「（だからごめんって！）」
『ふふふ…』
　百面相のヒカルを見て不思議そうな顔をしているアキラとあかりに気付き咳払いをしてアキラの用件を聞くヒカル。
「二人のことをお父さんにお話したら、ぜひおうちにつれてきなさいって！もしよかったら院生しけんまえにボクのおうちに来ない？」
「塔矢んち？」
「とーやめいじんのおうち!?わたし行きたい！」
　あかりが即答しているが悩むヒカル。
「（う～ん…今のうちに名人に会うのもなぁ…また他の人の人生狂わせ…）」
『行～き～た～い!!!あの者の所でしょう!?行きたいです!!!』
「どわぁ!!!」
　突然大声を出して耳をふさいだヒカルにアキラとあかりがびっくりして見つめる。

「だいじょうぶ？進藤くん？」
「ヒカル!?」
「あー…うん。へーき。じゃあ今度塔矢んち行くよ」
「！ほんとう!?よかった！こんどの金よう日とかどうかな？緒方さんっていう人が車出してくれるんだ！」
「（げ、緒方さん!?苦手なんだよなー）あー、アリガト。駅前まで行けばいいかな。学校終わってからだから3時くらいになるけど」
「うん！3時にえきで！…今日はあいてない？このまえのところでうたない？」
「わたしはいいよ～！」
『私もいいですよ♪』
「……」
アキラとあかり（と佐為）に引きずられる様に囲碁サロンに連れて行かれるヒカルだった…。

帰りは何故か居合わせた緒方に送ってもらうヒカルとあかり。
「駅まで来るの面倒だろう？」
との緒方の申し出により、金曜は家まで迎えに来てもらうことになった。
家を知られたら押しかけて来るんじゃないかと思い知られたくなかったのだが、あかりが道順をすべて説明するので無駄に終わる。
前回と違い、友好的な塔矢門下だから大丈夫だろうと己に言い聞かせる。
ヒカルは寝るまで佐為と打ち、気持ちを静めようとする。
「なんか…前回とは全く違う事になってるんだが」

『楽しみですねぇヒカル♪』
「…まぁ佐為が楽しそうならいいか」
『♪』
嬉しそうな佐為を見てヒカルも笑顔になる。
佐為のために――今世でヒカルが望んでいる事だ。
佐為がこの世界で名を残す――。
そのための布石は沢山打ってきた。
ヒカルは佐為が消える事を最も恐れている。
そのせいか、どんなに暑くても寝るときは佐為にくっついたままだ。

その日の夜、ヒカルは悪夢を見た。
そう、佐為が消えたあの日の夢だ。
「…佐為！」
泣きながら飛び起きる。
そしてすぐ愛しき人物を探す。
『…ちゃんといますよ。大丈夫、ヒカル…』
「佐為…佐為……」
『消えません。ヒカルを置いて消えませんよ。大丈夫、あの者と会っても、打ったとしても消えたりしません』
「…ホント？嘘ついたら怒るからな…」
『本当ですよ。大丈夫…』
抱きついて離さないヒカルの頭を撫でる。
ヒカルは時々こうして不安定になる。
そして佐為に撫でてもらうと安心するのか、すぐ眠りにつく。

『(ごめんなさいヒカル。前は挨拶もできず消えてしまいました…。でも今回は消えたりしません。絶対、ヒカルの傍から離れません。愛しきヒカ…)』

突然思考が停止する佐為。

自分は今何を考えていたのだと。

――――愛しきヒカル。

そこまで考えて佐為は口を押さえる。

この少女に対して自分は何を考えたのかと。

そして今の体勢は胸にくっついたまま寝るヒカルの頭を撫でている自分。

『(……ああ、私は…)』

自分の我侭を文句言いつつもちゃんと聞いてくれる。

毎日打ってくれている。

人生を…いただいた。

佐為は自分の気持ちに気付いた。

『(いつの間にか…ヒカルの事を…愛していたんですね……)』

自分の腕の中で眠るヒカル。

その寝顔はとても穏やか。

『私が…ヒカルを穏やかにさせてる…と、自惚れても良いのでしょうか』

佐為の呟きは闇夜に消えていった。

神さま！お願いだ！
はじめにもどして！
アイツと会った一番はじめに時間をもどして!!

そうか…オレは…気付くのが遅すぎたんだ。
アイツが消えて、初めてその気持ちに気付いたんだ。
佐為。愛おしい佐為。
お願い、消えないで。

あったかい…。
あ…オレ、佐為の腕の中で寝てたんだっけ…。
佐為…。

夜が更ける。

そして金曜日。
学校から帰り、準備を済ませる。
あかりもヒカルの家に待機している。
「（緒方さん苦手なんだよなぁ…）」
『前回胸を掴まれて怒鳴られましたからねぇ…』

「(今回やったらセクハラだぜ！訴えるぞ…)」
『(セクハラとは何でしょう…)』
待機していると緒方とアキラが家に来た。
緒方が美津子に挨拶をしている間、アキラに連れられて緒方の車に乗り込む。
楽しそうなアキラとあかりにヒカルは苦笑してしまう。
精神年齢が違うからか、どうも弟や妹にしか見えないのだ。
見た目はヒカルが一番年下なのだが。

後部座席で子ども3人、ワイワイと話してるとあっという間に塔矢邸。
「わぁ、とーやくんのおうちおっきい！」
「そっかなぁ。こっちだよ！」
「慌てんなって、塔矢。緒方さん送ってくれてありがとー！おじゃましまーす」
はしゃいでいるアキラを見て緒方は微笑む。
普段は大人しい子どもなのだが、同年代の友達ができた事が嬉しいのか、年相応なはしゃぎぶりである。
そして見た目が幼児のヒカルが一番落ち着いていた。
不思議な光景だな、と思いながら緒方は車を駐車場へ持っていった。

「おとうさん！進藤くんと藤崎さん、来たよ！」
「あらあら、アキラさん。そんなに二人を引っ張って来なくても…。ごめんなさいね。どうぞ、こちらへ」
アキラの母・明子に案内され、塔矢邸の研究会が行われている部屋へ向かう。
「よく来たね。アキラの父の行洋と言う者だ。よろしく、進藤くん、藤崎さん」
「よろしくお願いします。進藤ヒカルです」

「藤崎あかりです！お願いします！」
あかりは目の前にいるのが名人で、とても緊張している。
ヒカルの服の裾を握って落ち着こうと頑張っているがしばらくはこのままだった。

「アキラが毎日君たちの事を話すんだ。是非アキラと友達になってやってほしい」
「おっ、おとうさん！」
行洋の言葉に照れるアキラだったが、あかりの「え、もう友達でしょ？」という言葉にさらに照れてしまう。
「君たちの実力が是非知りたい。なんせ囲碁馬鹿なものでね。アキラがこんなに夢中になる子は初めてなんだ。アキラを夢中にさせる君たちと打ってみたい」
「わ…わたしなんて…弱いですし…」
「あかりは弱くねーよ。まだ覚えて2年じゃん。それにあかりと打ってると楽しくなるんだよなぁ」
「そうそう！藤崎さんはすごいよ！ボクすっごく楽しかったもの」
「それは楽しみだ。さ、打とう」
「その前に！」
突然の言葉に、声が聞こえた方向を見ると、手にお盆を持った明子がいた。
「おやつのお時間ですもの。先に糖分取っておかないと♪」
出されたものはケーキだった。
「あなた、囲碁もいいですけど、少しは子どもたちの事も考えて下さいね？」
「…む…」
視線の先には笑顔でケーキを選ぶ子どもたち。
ここは明子に中押し負けだな、と思い行洋は自分も糖分を摂取することにした。

『（塔矢行洋…また打てる。ヒカルの年齢的に違和感無い様に打つが…。ふふ、楽しみです）』

行洋との第２戦を控え、佐為は笑う。

それを見てヒカルは安心する。

（大丈夫、佐為が消える時の様な、あの慌て様じゃない。消えない）

ヒカルは目を閉じ、祈る。

（神さま。どうか連れて行かないで。オレと佐為を離さないで）

# 11．塔矢邸での一幕

ケーキを食べながらヒカルは考えていた。
何故自分は塔矢邸にいるのか、と。

佐為に言われるがままアキラと打った。
そうしたら前世と変わらずヒカルに対して一直線で、何故かヒカルと一緒に院生試験まで受けるというアキラ。
唯一違うのが、この世界のアキラはヒカルに対してすごくフレンドリーな事。
それはヒカルが囲碁を馬鹿にしたり素っ気無い態度をとっていないからなのだが。
そのアキラに丸め込まれる形で塔矢邸へ。

「(塔矢んちでこんなにくつろぐとは思わなかったぜ…)」
『塔矢もあかりちゃんも楽しそうですねぇ♪』
「(ああ。何か保護者の気分だ)」
『(ヒカルも楽しそうですけど…)』
口に出すと怒られるので何も言わない佐為。
笑顔で子どもたちを見守る。

「ご馳走様でした」
「ごちそうさまでした」
「ごちそうさまでした！とーやくんのおかあさん、おいしかったです！」
「ふふ、喜んでもらえてうれしいわ。緒方さんが買ってきてくれたのよ」
「そうなの？緒方さんありがとう。家まで迎えに来てもらった上ケーキまで」
「気にするな。喜んでもらえてなによりだ」
以外にも緒方は子どもが嫌いではないらしい。

アキラに囲碁友達ができたことを緒方なりに喜んでいた。

オヤツタイムも終了し、行洋に二面打ちしてもらうヒカルとあかり。

ヒカルは4子、あかりは9子を置いて対局が始まった。

盤面を目を輝かせて見ているアキラと、それを珍しそうに見ている緒方。

そしてこっそり子どもたちの写真を撮っている明子。

写真を撮って満足したのか、明子は夕飯作りに台所へ消えていった。

「…ヒカル君も囲碁を始めて2年なのかね？」

「はい。テレビで見て覚えて、今森下師匠（せんせい）の研究会に行かせてもらってます」

「…ふむ」

行洋は考え込む。

目の前にいる少年は、息子のアキラより遥かに強く感じる。

今打った感じだとアキラより少し強いだろうか、という程度なのだがそうではない何かを行洋は感じ取っていた。

そしてアキラも少し違和感を覚えていた。

先日打った時とは違った何か。

それがわからなくてヒカルをマジマジと見つめてしまって、ヒカルは慌てる。

「（前回がオレで、今回佐為が打ったってバレたかな？）」

『いえ、そんな事はないと思いますが…。先日の対局ではヒカルが私の打ち方をしていましたし…』

アキラもよくわからない違和感で、考え込むというよりはキョトンとした顔であった。

そしてヒカルに続き、あかりも終局した。

「二人ともすごいな…。ヒカル君は森下九段の研究会で力をどんどんつけて、あかりちゃんは囲碁教室だけなんだろう？才能がある」

「おがたさん、わたし1しゅうかんに6日はヒカルとうってるよ！ヒカルとうつとつよくなっていくのがわかるの！」
「え～…やめろよあかり…。オレは森下師匠(せんせい)のとこで打ってるからだよ。オレの力じゃない。あかりはあかりだけの力じゃん」
「ヒカルのおかげだよ！ヒカルとうってるとわかるもん！」
「…アリガト（まぁ佐為のおかげなんだが）」
『ヒカルもあかりちゃんに教えてるじゃないですか♪』
緒方が二人を褒めると、今度は二人がお互いを褒めだした。
なんというバカップルだと思わず緒方は思ってしまう。
「院生試験受かれば学校くらいでしかあかりと打つ機会が減っちゃうからなぁ。白川先生に頼んで森下研究会にあかりも来る？」
「えええ…わたしまだよわいから行きづらいよ…。もうちょっと力つけれたら行きたいな」
「だったら家(うち)の研究会に来るかい？」
行洋の言葉に皆が振り返る。
「あかりちゃん、君は自身が思っている以上に打てているよ。家で勉強しないかい？」
「え？え？とーや先生のところで？ヒカルは？」
「良かったらヒカル君もどうだい？森下には私からも言っておこう。」
突然の塔矢名人研究会へのお誘い。
正直ヒカルは遠慮したかった。
前世も含めて自分は森下門下であって、塔矢門下をライバル視していたから。
仲良く勉強なんてできない…そう考えていた。
が。
『はいっ!!行きます!!ヒカル、行きましょう!!!』
佐為はヒカルの考えている事などには全く気付かず参加したがっていた。

ヒカルも佐為が参加したいのなら…と塔矢名人の研究会へ参加することにした。
月曜と金曜に時間のあるものが研究会へ参加しているとのことで、参加するときはなるべく緒方が車を出してくれることになった。
そしてその時のアキラの嬉しがり方がすごかった。
「ほんとうに二人ともウチに来てくれるの？」
「うれしい！こんどからすごくたのしそう！」
「これからもよろしくね！」
などなど、ヒカルとあかりの手を握ってはしゃぐ。
アキラは先ほどの違和感の事などすっかり忘れて喜んでいた。
「（佐為…オレ超多忙じゃね？ほとんど休みなくね？）」
『楽しみです♪』
「（…はい。頑張ります）」
ヒカルはちょっと自分の体力作りも頑張らないといけないと遠い目をする。
「ねぇ、進藤くん。いまからボクと打ってくれないかな？」
「ん。いいぜ。ってかさ、呼び捨てでいいから。なんか〝進藤くん〟じゃ堅苦しいよ」
「あ、そうだね！わたしのこと下のなまえでよんで！わたしもアキラくんってよぶね！」
「そ…そう？じゃあヒカルとあかりちゃん…で」
「!!??（違う!!そうじゃねーよ!!あああ、また塔矢を変な方向に行かせてしまったかも…）」
「ヒカル、どうしたの？」
「…なんでもない。よし、アキラ打つぞ」
「…！うん！」
同い年の子からの名前呼びがまた嬉しくてテンションが上がってしまうアキラ。
微笑ましく見守る行洋と緒方。
本日何度この微笑ましい光景があったのか。
佐為もニコニコしながらアキラと打つ。

前世では敵対心があったヒカルとアキラ。
それでお互いが力を高めていった。
だが今世では同じ研究会で仲良くお互いを高めていく事になる。

何故か明子の強い希望で夕飯までごちそうになったヒカル達。
自宅にはすでに連絡をいれていたらしい。
明子の料理の腕はとても良く、和食から中華洋食なんでもござれと食卓に並んでいる。
子どもたちはすごく喜び、そろって「いただきまーす！」と言った後食べ始めた。
大人数で食卓を囲う事に慣れていたアキラも、ヒカルとあかりがいることでいつも以上に食事が美味しく感じられた。

「じゃあ院生試験の時会おうな。バイバイ」
「うん！またねヒカル！あかりちゃんもまた来てね！」
「またねアキラくん！らいしゅうまた来るね～！」
すごくフレンドリーな別れ。
前世との違いにため息が出てくるヒカル。
どうしてこうなった？
自分がアキラに会いにいったせいで？
ヒカルの悩みは尽きない。

帰宅後。

「塔矢から…ヒカルって呼ばれるのか…。前と違いすぎて塔矢が怖い…」

『ヒカル、塔矢じゃなくてアキラでしょ。すぐ慣れますよ♪』

「……うん。頑張る」

# １２．院生試験

ついに院生試験を受ける日になった。
今世では平八の説得もあり、美津子はヒカルが進もうとしている道を理解し応援している。
囲碁をし出してからは我侭も言わず学校の成績も悪くないヒカルに対して、院生試験の料金を出すことに抵抗がない。
ヒカルと美津子は日本棋院の中へ入って行く。
「進藤君だね。どうぞ、こちらです」
日本棋院に着き、受付にて案内してもらう。
案内された先から対局室が見え、院生が打っていた。
「(懐かしいな。前もこんな感じだったね)」
『そうですね！前はヒカルが緊張して…』
「(恥ずかしいからやめて)」
赤面して佐為をジト目見るヒカル。
それをクスクス笑う佐為。
またこんな日がくるとは思わなかった二人。
ヒカルもワクワクしていた。
「(塔矢はまだ来てねーみたいだな)」
『こら、塔矢じゃなくてアキラ、でしょ。確かにまだ見当たりませんね』
「(うへぇ…。まだ慣れねーや…。申請順かな？まぁ後で会うだろ)」
『そうですね。まずは私達が受からないといけませんね』
「(佐為、頑張って)」
『はい♪』

「今日はお疲れ様でした。詳しい案内は資料を…」
対局室とは別の方向から懐かしい声が聞こえてきた。
「(篠田院生師範だ！)」
『この頃も先生だったのですね！懐かしいです！』
そして、その懐かしい声と一緒に馴染みのある声もした。

『「あ」』
「あ！ヒカル君！オレ受かったぜ!!!」
「わっわあああっ」
そこにいたのは笑顔の冴木。
受かった喜びでヒカルを抱き上げてくるんと一回りする。
目尻に涙を浮かべ喜ぶ冴木にヒカルも「良かった！」と喜んだ。
「次はヒカル君だね。キミなら絶対受かるから、一緒に行こうな！」
「うん。絶対受かるよ！あ、この後塔…じゃない、アキラも来るんだ。塔矢名人の息子だけどわかる？そろそろ来ると思うんで、もし会えたら受けてる最中だって伝えてくれない？」
「うんいいけど…。塔矢アキラと知り合いだったんだ？」
「成り行きでね。友達になったんだ」
「ふーん。まあ頑張って！行ってらっしゃい！」
「行ってきます♪」
篠田に案内され、試験場へ向かう。
冴木が受かった事で気合も入る。
ヒカルと佐為まるでシンクロしているかの様に「よーし」と腕まくりをしていた。

篠田が座り、促されヒカルと美津子も座る。
前回と違い今回は院生受験に必要な書類はあらかじめ提出していた。
推薦者はもちろん森下。
「ヒカル、お母さん応援してるから。頑張るのよ！」
「うん！絶対受かるから見てて！」
ヒカルも自分が打つ姿を美津子に見てもらう事で、真剣さをアピールしていた。
「さて進藤ヒカルく…いえ、進藤ヒカルさんですね。棋譜は見せていただきました。森下九段門下という事で間違いないですね？」
「はい」
「君は6歳という年齢にも関わらず、熟練された様な素晴らしい棋力

です。どうぞ、置石は3子で、今から打ちましょう」
「はい！（佐為！行くぞ！）」
『ええ！行きましょう！』

ついに試験が始まった。
佐為は前世の若獅子戦の時のヒカルくらいの棋力で打つ。
気負いもなく、ヒカルはあらかじめ胡坐をかいているため失礼もしない。
今回提出した棋譜は森下・白川・都築と打ったもの。
篠田はヒカルの棋譜を見て、これを6歳の子どもが打ったという事実に驚いた。
もちろん置石はあったが、内容はとても鮮麗されたものであり、つい最近まで園児だったヒカルが打ったものにはとても見えなかった。
見た目はアウトドア好きなボーイッシュな女の子。
だが、対局となると雰囲気がガラリと変わる。
正確に言うと、見た目はそのまま小1女子（見た目男子だが）だがその場の空気が変わるのだ。
まるで高段者、例えるならタイトルホルダーが醸(かも)し出す空気そのもの。
とても小1女子が出すものではない。

そして――――。

「キミは素敵な碁を打つね」
篠田が発した突然の言葉にヒカルは「え？」と聞き返す。
「棋力も間違いなく高い。来月から来なさい」
「！やったあ!!」
「ヒカル！おめでとう!!」
受かった事でヒカルと美津子は手を合わせて喜ぶ。
ここで美津子はヒカルが天才なんだと改めて思う。

自分の娘が、たったの6歳の娘がとても大きく見えた。

試験場から出ると、そこにはアキラと明子がいた。
「ヒカル！…うかったみたいだね？」
「おう！受かったぜ！次はアキラ、頑張れよ！」
「…！うん!!」
「あ、冴木さんって人に会った？オレの兄弟子なんだけど」
「あったよ。ヒカルが今うけてるっておしえてくれたんだ。もうおわったからさきにかえるって言ってたよ」
「そっかー。オレも研修部屋見学したら先に帰るから、後で連絡くれよ。まあアキラなら大丈夫だろうけど」
「…うん。きんちょうしてるけど、ヒカルがおうえんしてくれてるからがんばる」
緊張した面持ちだが、笑顔で答えるアキラ。
腕を組んで「大丈夫！」と笑顔でアキラに太鼓判を押すヒカル。
それを微笑ましそうに見る母親達。
そしてアキラは試験場へ――――。

研修部屋に案内され、説明を受けるヒカルと美津子。
だがヒカルは部屋にいる人物達を見て驚いていた。
（見知った顔がいない――――）
それは当たり前のこと。
前世でヒカルが院生になったのは中学1年生の時。
それよりも6年も前なのだ。
当時院生で最年長だった伊角もまだ院生にはなっていなかった。

（…なんだか寂しいな）
和谷や伊角に会いたい、そんな気持ちが芽生える。
ヒカルはそんな感情を押し殺す。
佐為のために生きると決めた。
佐為さえ喜べば、それでいい。

少し寂しそうな顔をするヒカルに佐為は気付いた。
何も言わず、傍に立って頭をなでる。
笑顔の佐為を見たヒカルはニコッと笑って検討しているグループに混じったりした。
「キミ、もしかして進藤クン？」
ふとそんな声が聞こえ、発した方向を見る。
「（あれ、この人もしかして…）」
『塔矢門下の…芦原さんでしたか』
「アキラから聞いてるよ～！キミ強いんだってねぇ！あ、俺芦原って言うんだ。アキラの兄弟子だよ。よろしくね！」
「進藤ヒカルです。よろしくお願いします」

院生の皆にも挨拶を済ませて帰路につく。
美津子に褒められながら手をつないで歩くのは少し恥ずかしかったヒカルだが、前世で散々迷惑をかけた負い目があるためか大人しくしている。
ちなみに反対側の手は不自然にならない程度に佐為の着物の袖を掴んでいる。
「（佐為、お疲れ様。来月から楽しみだな）」
『ええ、そうですね♪以前のメンバーは見当たりませんでしたが知っている顔がちらほらいましたし、本当に楽しみです♪』
「（芦原さんとか、若獅子戦の時の村上さんとか。う～！楽しみ！）」

笑顔で歩くヒカル。

佐為がいて、アキラがいて、毎日が目まぐるしい。
だけど、それはとても充実した日々。
忙しいけれど、佐為に大好きな碁を打たせてあげることができる。
手加減した碁だけれども、それは徐々に解消できる。
ああ、佐為。
オマエがいてとても楽しい。
佐為も楽しい？
憑いたのがオレで本当に良かった？
オレは佐為が憑いてくれてとても嬉しい。
神さま、どうかこの幸せを壊さないで下さい。

帰宅後、しばらくしてアキラから合格したとの電話があった。
今回受けた３人全員が受かり、来月からヒカル・アキラ・冴木が院生メンバーに加わる。

その日の夜は森下の家に呼ばれ、宴会が行われた。
もちろん主役は冴木とヒカル。
ヒカルは佐為の碁を褒めてもらえて得意気にしていた。
「(佐為、明日は塔矢名人の研究会行って報告しような)」
『はい♪』

楽しい日々は続いて行く。
大丈夫。
この世界の佐為は消えない。
ヒカルは自身に言い聞かせる様に、手に持っているジュースが入ったグラスを見つめた。

## １３．一緒に

院生試験合格を決め森下家で宴会があった次の日、ヒカルとあかりは塔矢家にいた。
「ヒカルもアキラくんも、ほんとうにおめでとう！」
「ありがと、あかり」
「ありがとうあかりちゃん！」
今日は塔矢家で『アキラ＆ヒカル院生合格おめでとうパーティー』が行われている。
昨日に引き続いての宴会で、ヒカルと佐為はウキウキしながら参加していた。
見た目は６才児とはいえ精神年齢は１６歳になるヒカルも明子自信作の料理を楽しんでいる。
楽しむ子どもたちを見て佐為も微笑む。
「アキラー、一人だと危ないからオレと一緒に棋院行こう！進藤クンも一緒にどうだい？」
「芦原さんありがと。でも駅も違うし、一人で大丈夫だよ。最寄り駅まではじーちゃんが送ってくれるし」
人懐っこい笑顔で芦原がヒカルも誘うが、ヒカルはそれを断った。
なんせ中身は１６歳。
１３歳の芦原は年下に見える。
子ども扱いされるのはちょっと切なかった。

宴会はしばらく続く。
その場をこっそり抜け出したヒカルは縁側に座り庭を眺めていた。
「（今日は研究会なさそうだなー。塔矢先生までずーっと門下の人とアキラの話してるし）」
『そうですねぇ。残念ですが、皆さん嬉しいんですよ。行洋殿もアキラを自慢したいのでしょうし』
「（……わかるんだけど気持ちの整理が追いついてない。あの塔矢先

生の威厳どこいった)」
『普段はこの様な感じなのかもしれませんよ。私達が知らないだけで』
「(うーん…。確かに、前は…塔矢との付き合いは薄かったもんなぁ。塔矢はライバルでアキラは友だち…か)」
佐為と話しつつ、前世での事をふと考えるヒカル。
自分が居なくなった世界はどうなったのか。
世界そのものが時間の巻き戻りをしているのか、それとも…。
ヒカルは考える事をやめた。
今ここに佐為がいる事実、それだけでいいと。
「(佐為、オレ、今がすごく楽しい。オマエが居てくれる。でもごめんな。本気で打たせてあげれない)」
今はまだ、佐為に本気で打たせてあげれない事に罪悪感を覚えているヒカル。
佐為が今行洋と対局した場合、勝つのは佐為であろう。
それくらい強い佐為に打たせてあげれない。
『何を言ってるんですか。私だって今すごく楽しいんですよ。ヒカルがいて、ヒカルと対局できる。ヒカルと楽しいことを共有できる。それがどんなに幸せなことか』
その言葉を聞いてヒカルは微笑む。
「(オレも幸せだよ)」

床についていたヒカルの手の上に自身の手を重ねる佐為。
もう言葉はいらなかった。
今が幸せならそれでいい。
お互いの熱を感じ合い、また庭を眺める。

――――ずっと、一緒に。

ただ一つの願い。

宴会は夜まで続いた。

「あれ、アキラ？」
「アキラくんだー！こんなとこでどうしたの？」
「ヒカル、あかりちゃん？」
宴会から数日後、囲碁教室に向かうあかりをヒカルが送って行く途中でアキラに出会った。
実はアキラも囲碁教室へ向かう途中で、今日が最終日。
本来は後1年は続けるつもりだったが院生試験に合格したので辞める事になった。
アキラが通っている囲碁教室と白川囲碁教室は少し近かったらしい。
「(アキラが通ってる囲碁教室か…。なーんか気になるな…)」
『もしかして、加賀がいるんじゃありませんか？ほら、以前言っていたじゃありませんか。アキラと囲碁教室が一緒で手加減して打たれたって』
「(あ！そっか！加賀だ！加賀がアキラ…塔矢に手加減されるんだ！)」
『それで加賀は…塔矢の事を嫌いになるんでしたね』
「(う～ん…。もう手加減して打ったりしたんだろうか…。アキラが嫌われるのは避けたいな…)」
『ヒカル、アキラについていきませんか？最後との事ですし、大丈夫で

しょう』
「(そうだな。気になるし)アキラ、オレついてっていーか?」
「え…いいけど…あかりちゃんは?」
「わたしならだいじょーぶだよ!ほら、もう教室見えるし。帰りはみんなで帰ろうよ!」
「そうだな。あかりそっちで待っとけよ。どっちが遅くなっても迎え行くから」
「うん!じゃああとでね~!」
笑顔で去っていくあかりを見送るヒカルとアキラ(+佐為)。
戸惑いながらもアキラは一緒に行くと言ってくれたヒカルの行動が嬉しかった。
付き添いが教室の先生によって認められ、ヒカルはアキラの傍にいた。
椅子に座っているからあまり辺りを見渡せず、立っている佐為に加賀がいるか探してもらう。
『あ、それらしき目つきのやからがこちらに来ますよ』
「(それらしき目つきて…。あ、来た。おお、ミニ加賀だ…)」
『目つきは悪いですがこの頃は可愛いですねぇ』
「(だから撫でるな!)」
前世とのギャップからか、加賀を撫でる佐為。
もうそれはヒカルにとって爆笑モノなのだが、なんとかこらえる。
「おう塔矢。こっちのちびっこいのは?」
「こんにちは加賀さん。進藤ヒカルくん。ボクとおなじ1年生でいっしょに院生しけんうかったんだよ」
「進藤ヒカルだ!よろしく加賀サン?」
「…院生?マジか…」
チビ扱いされたのが悔しかったヒカルだが大人気ないことはせず挨拶をする。
加賀は目の前のちびっこ達が院生試験に受かった事に驚愕していた。
アキラが受けるとは聞いていたが、まだ合格したとは聞いていな

かった。
そしてヒカルの存在も知らなかった。
少し悔しい思いもしたが、加賀にとってこの時のアキラはライバルであり目標であり可愛い後輩。
複雑な表情をしたが、すぐ笑顔になる。
「すげーな、オマエら。院生受かるなんてよ。……これで親父も塔矢には勝てない事を納得するだろ」
加賀の最後の呟きは誰にも聞こえなかった。
その後仲良くなった3人は和気藹々で対局を楽しんだ。

「(これで詰碁集バラバラルートは回避できたな)」
『ハイ♪…しかし、加賀もこの頃はずいぶん素直だったんですねぇ…』
「(塔矢に見下されたって思ってたんだろうしなぁ。囲碁続けるのかな?)」
『それはわかりませんが…加賀の未来が明るいといいですね』
「(そうだな…)」
加賀の小学校が隣区だと知ったヒカルは今後も会う約束をする。
前世において加賀は恩人だから少しでも恩返しがしたかった。
会う事で恩が返せるとは思えなかったがヒカルは加賀に会いたかった。
まるで弟が兄を慕う様に――――。

教室が終わり、皆に挨拶を済ませたアキラとヒカルはあかりが待つ教室へ向かう。
あかりの方は教室がすでに終わっていて一人ぽつんとベンチにいた。
「遅くなった!ごめん!」
「ううん。そんなにまってないよ。10分くらいだよ」

そんなあかりは碁会所の皆がくれたのか、お菓子やジュースを口にしていた。
羨ましがったヒカルにあかりは「いっぱいあるから」と2人にわける。
しばらく3人はお菓子とジュースで駄弁り会を催していたが、事務仕事を終えて帰宅しようとしていた白川に見つかりまだいたのかと怒られた。
ヒカルとあかりでアキラを駅まで送り別れた後は二人で帰路につく。
「あかり、帰ったら打とうぜ！なんかすっげーあかりと打ちたい」
「うん！わたしもヒカルとうちたい！」

囲碁部を思い出す。
加賀・筒井・ヒカルで出た冬季大会。
三谷・筒井・ヒカルで出た夏季大会。
もう出る事は叶わないけれど、大切な思い出。
その思い出の中にいたあかりと佐為がヒカルにとって癒しになる。

前世とは異なる未来へ。
佐為とずっと一緒に。
ヒカルは笑顔で歩き出した。

# １４．初めて

季節は流れ、冬になった。
現在ヒカルは２組上位、アキラと冴木は２組１０位前後にいる。
この頃になると院生メンバーに慣れ、ヒカルは年長組に甘える事を覚えていた。
「よお進藤、塔矢。これやるよ」
「わぁ！ありがとう村上さん！美味しそう！」
「村上さんありがとうございます。えへへ」
意外にも一番この二人を甘やかしていたのが前世の若獅子戦でヒカルと対局した村上である。
ヒカルの太陽の様な眩しい笑顔とアキラの照れた笑顔が見たくてちょっとしたお菓子をついつい与えてしまう。
例えるなら向日葵と紫陽花。
対極にいる二人の笑顔は院生メンバーに癒しを与えている事を二人は気付いていなかった。

「（何か前世と違ってオレら可愛がられてる？）」
『最年少って事も大きいのでしょうが…何より今のヒカルは生意気ではないですからね』
「（う…）」
前世を思い出し言葉に詰まるヒカル。
子どもだったからというには子ども過ぎた。
生意気発言をしては周囲を困らせたものだと反省する。
そう、反省したからアキラは友好的なのだ。

お昼になり、ヒカル繋がりで仲良くなったアキラと冴木も一緒にお弁当を食べる。
他愛もない話で盛り上がり、ヒカルは改めて今の生活がどれだけ恵まれているか実感する。

隣を見ると佐為がいる。
前世を含め、佐為と一緒にいる期間はちょうど5年。
それがとても嬉しく、こっそり二人でお祝いでもしようかと思う。

飲み物がなくなり、ジュースを買いに行こうとロビーに出るヒカル。
そこに院生ではない誰かがいた。
「(そろそろ院生試験の時期か。誰か受けるのかな?)」
『そうですね…ん?どこかで見た様な…』
小学生高学年と思われるその人物を見て考えるヒカルと佐為。
横顔だったからあまり顔が見えない。
そこにいるショートカットの少年に話しかける事にした。
「ねぇお兄さん、院生試験受けに来たの?」
「え?」
話しかけてきたヒカルの方に振り向いた少年。
その顔は――――。
「(伊角さん…!!?)」
前世で散々お世話になった伊角がそこにいた。

残りの昼休み、伊角と話をしていたヒカル。
伊角も懐いてくるヒカルに心を許して談笑する。
試験は午後からという事で早く着いた伊角はロビーにいたのだが、
それまで試験のことを考えすぎていて不安になっていた。
そこに屈託のない笑顔で話しかけてきたヒカルと会話することで
緊張もほぐれる。
ヒカルの「伊角さんなら絶対受かるから!」という決定事項発言に
戸惑うも、何故か説得力を感じ「頑張るよ」と返事を返す。
伊角と別れたヒカルは休憩室に戻り、「遅かったね」とアキラと冴木
に言われるが笑顔で誤魔化した。

午後の対局も終わらせ、対局相手と検討していると背後に気配を感じるヒカル。
振り返るとそこには笑顔の伊角がいた。
「伊角さん受かったんだね！」
「うん。進藤君がオレの緊張をほぐしてくれたから、落ち着いて試験を受けれたよ」
「よかった！」
二人が仲良く話してるのを皆が「誰？」と尋ねて来てヒカルは説明をする。
ヒカルのおかげで伊角も院生メンバーに気後れせずに話すことができた。

日課の寝る前の対局をしながら今日の事を話す。
「伊角さんついに院生になるんだな～！ホント嬉しいぜ！」
『はい♪伊角さんとは…本当に以前のプロ試験以来ですものね…』
「そうだな…。あれから伊角さんどうしたんだろうな…」
もう知ることができない前世。
二人は思いふけながらある棋譜の検討をする。
それは名人戦の最終戦の棋譜だった。
今年、塔矢行洋は名人戦防衛に敗れた。
そしてなんと新名人になったのが森下である。

森下はヒカルの才能を認めて、ヒカルのやる気に自分も奮い立たせていた。
そこに勢いに任せてなんと塔矢行洋を破り新名人となった。
行洋はこの年名人戦は防衛できなかったものの、現在天元戦を争っている。
「は～、何度見ても森下師匠(せんせい)のこの一局しびれるぜ！」
前世の森下より7年半も前の今の方が勢いがある。
本因坊戦もリーグ入りしているのでまだまだ勢いは止まらないであろう。
前世とは違った方向へ進む。
以前と同じだと佐為が消えてしまうかもしれないと恐れているヒカルには、未来が違う方向へ向かうのは不安ではあるが安心もできる。
「塔矢先生も負けたとはいえまだまだ勢いがすごいし、なんだかあこがれるぜ！」
『……』
「…？佐為…？」
『あ…いえ、見ごたえのある棋譜だなと…』
佐為は誤魔化したがヒカルは気付いた。
自分もこんな対局がしたい、そう佐為が考えているんだと。
まだ小学生の自分が憎くなる。
しかし、仕方がないのである。
7歳の子どもが高段者顔負けの棋力を見せ付けるわけにはいかない。
ヒカルは佐為に「打とう」と言って二人は対局を始めた。
打っていてヒカルは考える。
自分の棋力もすでに高段者。
佐為はタイトル取れるほど。
なのに手加減して打っているのは良いことなのか、と。
「なぁ、佐為」
『はい？何でしょうヒカル』

「オレ達手加減して打ってるだろ？……それって失礼なのかな？」
その問いに佐為は一瞬言葉に詰まった。
ヒカルは「オレ達」と言ったが打っているのは佐為。
徐々にではあるが棋力を上げて打っていっている。
しかし二人の棋力はこんなものではない。
ヒカルも森下・塔矢名人の研究会で勉強をし、佐為と毎日打っている事で棋力を格段に上げトッププロに引けを取らないまでに成長している。
「オレ達イカサマみたいなもんなのかな…と思ってさ」
『ヒカル。イカサマなんかではありませんよ。これはあなたが経験して積み上げたものです』
そう言って笑顔で佐為は碁盤を指す。
そこには二人で完成させた美しい一局。
佐為とこんなに美しい一局が打てる、その事にヒカルは思わず顔がほころぶ。
「そうだよな。最初に言ってたのに。こーんなチビが強すぎたら目立ちまくって大変だ。なんだかアキラに失礼な気がしてたけどオレらチートだからしょうがねーか」
『（ちーと？）そうです。そうですねェ…ヒカルが中学を卒業する頃にはトッププロとして活躍しても良いのでは？』
「うん！わかった！やっぱ佐為に聞いてみて良かった。安心できる回答を得られるもんな！」
ヒカルはにっこり微笑み、佐為も微笑み返す。
その時階下から美津子の「早く寝なさい」という声が聞こえ慌てて床に着く。

『（さっきのヒカルの笑顔は危なかったです…。思わず抱きしめてしまうところでした…）』
「佐為、なにやってんだよ？寝ようぜ？」
『はっ、はい！』

一緒に寝るのは毎日のことなのだが、佐為はヒカルになるべく触れない様にしている。
好きだと自覚してからはヒカルを大切にしようと、触れてしまうとキスでもしそうな自分を抑えようとしているためである。
だがそんな佐為の思いもむなしくヒカルが思いっきり抱きついてくる。
特に冬はそれが酷くなり、完全に抱き枕状態だ。
今はまだヒカルが子どもだから良いが、これから成長したら――
そう考えるだけで佐為はため息が出そうになった。
「なあ佐為。前から思ってたんだけどさ」
『はい何でしょう?』
「寝るときまで烏帽子かぶって邪魔じゃねーの?」
『え…? いえ特には…。それに私の時代では人前で烏帽子を取るという行為は無礼に当たりましたので』
「え~? マジで? 何かそれかぶって布団に入ってると違和感というか…烏帽子が壁に埋まってるというか…とりあえず、ソレ脱げねぇの?」
『だっ、駄目です! 元服してからは誰にも見られた事がないんです!』
佐為の烏帽子を取ろうとヒカルが手を伸ばす。
だがその手を佐為が掴む。
「ダメなの?」
『(う…)』
ヒカルの上目遣いに佐為の心も揺れる。
しかし佐為の時代では人前で烏帽子を取るという事は下着姿になるよりも恥ずかしい行為。
それを取る時。
それは。
『そんなに取ってほしいんですか?』
「うん! だって帽子かぶってるなんて寝てる感じじゃねーじゃん!」
『……帽子とは違うんですが…』

「そうなの？でも見てみたいなァ……」
『……ヒカルが望むなら、取ってもいいですよ。ただし…』
「ただし？」
『私と寝所を共にできますか？』
少し間を置いた佐為の言葉。
人前で烏帽子を取る時は限られている。
もちろん人にもよるが。
佐為は自分がついに言ってしまったと、たった7歳の少女に何を言ってしまったんだろうとドキドキしながらヒカルを見つめる。
そしてヒカルの回答は。
「寝所を共にって…いっつも一緒に寝てんじゃん！じゃあ問題ないな！」
にっこりと笑顔で答える。
その言葉を聞いて佐為はうな垂れた。
現代風に説明するならば「ｏｒｚ」状態。
そう、ヒカルは性に疎かった。
そして勉強不足でもあった。
『(ヒカルのばか…私の気も知らないで)』
「佐～為～？」
『…いえ何でもないです。寝ましょう』
「烏帽子は取らねーの？」
ヒカルの言葉に佐為は覚悟し、それに手を伸ばす。
『わ…笑わないで下さいね…』
「？別に笑わねえけど…」
この時代では被らない方が当たり前なのだと自分に言い聞かせて佐為は烏帽子を取った。
ドキドキしながらヒカルを見る。
そのヒカルはキョトンとした顔だ。
何か自分は変なんだろうかと佐為が頭を隠そうとしたらヒカルがそれを阻止する。
『ヒカル？』

「頑なに拒否するからなんかあるんかと思ったら、なんだ、キレイな髪の毛だな」
『！』
佐為の髪の毛を撫でる。
ふんわりとした感触を確かめながら「早く寝ようぜ」と佐為をベッドに促す。
こんな初めての行為に佐為は顔を真っ赤にした。
しかし電気を消しているのでその様子をヒカルに知られることはなかった。

『責任…取って下さいよ…』
「なんか言ったか？」
『何でもありません！ほら、ベッド行きましょ！』
「おう！」
どこか嬉しそうなヒカル。
そしていつもの様に佐為に抱きつく。
だが今日はいつもと違った。
いつもはされるがままだった佐為がひかるを抱きしめ返したのだ。
「佐為…？」
『こっちのほうが温かいでしょ？』
「…うん。あったかい。佐為のぬくもりだ」
ヒカルが佐為の胸元に頬を寄せた時、佐為はヒカルの額にキスをした。
「!!?ささささ佐為?!」
慌てて飛び退こうとするが、佐為に抱きしめられていてそれは叶わない。
月明かりの下、目がなれてきてヒカルの顔が真っ赤になっているのがわかる。
『おやすみなさい』
「……おやすみ」
烏帽子を取った姿を見られたのがヒカルが初めてだった佐為は決

意をする。
光源氏計画上等、ヒカルを自分の嫁にする、と。
『(可愛いヒカル。愛してます)』
ヒカルを抱きしめる力が強くなる。

ヒカルは佐為に依存しているが、佐為もまたヒカルに依存している。
お互いの気持ちに気付くのはそう遠くない。

そうして夜が更けていく。

(ちくしょう…佐為め…からかいやがって…。今に見てろよ、大きくなったら誘惑してやるんだからな!)
その思いも虚しく中々成長しないヒカルであった。